

# 100年経っても変わらぬ形で愛される コンバースのような住まいを作りたい。



眞野さんが買い集めたコンバース「オールスター」の一部。ピンクと違って実にも多彩な色合い。写真右は岡本太郎さんとコラボした「太陽の塔」モデル。

一級建築士事務所 ARCHIXXX  
眞野サトル建築デザイン室

眞野サトルさん「44歳」

取材／福島恵美 撮影／武田憲久

伝統の名作「オールスター」を毎日履く

ずらりと並んだピンク色のスニーカー。スパンコールがびっしり付いた華やかなもの、優しい桜色をした定番のキャンバス地など実に様々。これらは眞野サトルさんがコレクションしている、コンバースのモデル「オールスター」だ。この8年程の間、2回あった葬儀を除き、毎日、コンバースを履いている。

「オールスター」には約100年の歴史があり、誕生した頃からほとんど形が変わっていません。しかもデザイン、素材、色にはバリエーションがあり、老若男女に愛されています。同じ様に、長く大切にしてもらえれば普遍的な住まいを作りたい。建築家である限り、コンバースを履き続ける！と決めました」

自分の印象を強くしたピンク色をセレクト

しかし数ある色の中で、なぜピンク色なのか。そのカギは、今回、取材でお邪魔した眞野さん設計の大西邸（大阪市）にあった。約3年前。大阪・梅田にある建築家情報空間「ASJ UMEIDA CELL」で行われたイベントに来ていた大西さん夫妻は、眞野さんの足元に目が釘付けになる。ピンク色のスパンコールがキラキラと輝くコンバースが印象的で、話しをすることに。眞野さんが設計したツリーハウスがある家のパネルに興味を持ち、プランの提案を依頼。大西さん家族の希望が盛り込まれた、最初のコンセプトほぼそのままに家づくりが進んだ。その際、奥様の知子さんから「ピンク色の靴が目立っていて良かった」と聞き、「これからはピンク色のコンバースを履こう」という気持ちになったのだ。

オフタイムもオンタイムも、履くのはピンク色だけ。旅行に行く時はお気に入りを、自宅と事務所の間を50分かけて歩いて通勤する時は、一番柔らかなピンク地の靴を選ぶ。プレゼンテーションに臨む時は、スリッパにネクタイ、そして派手目のピンク色の靴。「ビジネスの場には違和感がありますが、『好きなんですか』と聞かれ、話のきっかけになります。上棟式にだけ履くものもあります。ピンク色と白色のストライプで、紅白の幕が張られたおめでたい場所にピッタリ」と笑う。建主への竣工祝いには、家族全員にコンバースを贈る。普段着ている服や雰囲気などから、1人ひとりに似合う一足を考え抜いて。コミュニケーションを十分に取って住まいを設計する、眞野さんらしいプレゼンテーションだ。

現在、持っているコンバースは約80足。「自宅にも事務所にも、そろそろ置き場がなくなりそうで...」。建築への思いと重なる靴とあれば、どんどん増やしてもよしとしたい。



取材は大西邸で実施。眞野さんと親しく話す大西知子さんはご主人、3人の娘との5人家族。父娘の仲が良く、2人の娘がいる眞野さんの理想だという。



ロフトを望んだ三姉妹のために、家の中に山小屋調の簡単な家を3つ作った。3人が独立した後は容易に解体できる。2匹の猫を含め、家族皆が楽しめる住まいが実現。元々あったサルスベリの木も大切に残している。



シューズボックスには大西邸竣工祝のコンバースが並ぶ。家族のサイズもちゃんと確認して選んでいるのはさすが。



眞野サトル（大阪市北区）  
1971年大阪府生まれ／1991年  
中央工学校大阪建築室内設計  
科卒業後、共同設計株式会社  
入社（～1999年）／2002年一  
級建築士事務所ARCHIXXX  
眞野サトル建築デザイン室設立